

育成就労制度における日本語講習モデルカリキュラム開発等事業

【概要書】育成就労「A1 相当講習」「A2 目標講習」モデルカリキュラムの活用について

2026 年 8 月 31 日

1. モデルカリキュラムの概要・構成

- 本概要書では、「育成就労制度における日本語講習モデルカリキュラム開発等事業」（厚生労働省）において開発された、連続する 2 つの日本語講習モデル、「A1 相当講習（100 時間）」「A2 目標講習（100 時間）」をご案内します。
- 育成就労制度では、対象となる外国人材が A1 相当の日本語試験（JFT-Basic A1/JLPT N5 等）に合格していない場合、就労開始までに A1 相当の日本語講習の受講が求められます。この度開発した「A1 相当講習」モデルカリキュラムは、そうした外国人材を対象にした、日本で安全かつ円滑に生活・就労を始めるための最低限の日本語力を身につけることを目的とした講習モデルです。
- 「A2 目標講習」モデルカリキュラムは、A1 相当の外国人材が日本での生活・就労を開始後、育成就労期間を通して地域・職場へ定着できるよう継続的に日本語力を向上させることを目的としたカリキュラムです。また、育成就労制度では、育成就労期間（3 年間）の終了までに「日本語教育の参照枠」の A2 相当に達することが求められます。本モデルカリキュラムは、そのために必要な自律学習支援を行うことも目的としています。
- 本モデルカリキュラムは、監理団体・企業へのアンケートや監理団体、入国後講習研修機関、企業、日本語教師、技能実習支援者、有識者へのヒアリングによる調査、就労分野の認定日本語教育機関の知見、有識者検討委員会での議論を基に作成されました。
- 本モデルは、以下の 7 点で構成されています。「A1 相当講習」「A2 目標講習」それぞれに、使用教材の異なる 2 つのモデルシラバスがあります。教育現場の状況に応じて、適当なシラバスを選択してご活用ください。

概要書	1	育成就労「A1 相当講習」「A2 目標講習」モデルカリキュラムの活用について
A1 相当講習	2	カリキュラムの概要（A1 相当講習）
	3	モデルシラバス①（いろどり・フリーコンテンツ版）
	4	モデルシラバス②（いろどり・はた日版）
A2 目標講習	5	カリキュラムの概要（A2 目標講習）
	6	モデルシラバス①（いろどり・つなひろ版）
	7	モデルシラバス②（いろどり・はた日版）

※シラバスのタイトルは、以下の通り、教材名の略称を示しています。

- ・「いろどり」＝「いろどり 生活の日本語」（国際交流基金）
- ・「つなひろ」＝「つながるひろがる にほんごでのくらし」（文部科学省）
- ・「はた日」＝「はたらくための日本語 職場のコミュニケーション」（凡人社）

2. モデルカリキュラムの設計

- 育成就労制度において、対象となる外国人材が入国する際の日本語習得状況は、複数のパターンが考えられます。「A1 相当講習」「A2 目標講習」の各モデルは、最も多くの外国人材に該当すると思われる以下の学習者を想定して作成されています。

「A1 相当講習」の想定対象者

- 一定の日本語講習を受講している（ひらがな・カタカナの読み書きはできる前提）
- A1 相当試験（JFT-Basic A1/ JLPT N5 等）の合格に至っていない

「A2 目標講習」の想定対象者

- A1 相当講習の修了者、または A1 相当試験（JFT-Basic A1/JLPT N5 等）の合格者

- モデルカリキュラムでは、主たる目的として以下の 2 点を設定しています。

- ① 対象となる外国人材が、育成就労期間の初期段階に円滑に生活・就労を開始するとともに、中長期的に地域・職場へ定着できるよう支援すること
- ② 育成就労期間（3 年間）の終了までに、日本語要件として定められた「日本語教育の参照枠」の A2 相当に達することができるよう支援すること

- 各講習のカリキュラムでは、上記①に基づき、主軸となる目標を次のように設定しています。

- 円滑な生活・就労開始のための日本語コミュニケーション力の向上（A1 相当講習）
- 就労開始後の地域や職場への定着に向けた日本語コミュニケーション力の向上（A2 目標講習）

- 上記②に関して、育成就労の目標となる日本語能力は、原則として「日本語教育の参照枠」の A2 相当水準であり、育成就労期間（3 年間）の終了までに試験の合格によってその能力を確認することになります。この「A2 相当水準」という日本語能力の要件について、本モデルの開発では、以下の考え方を前提に「A2 目標講習」のカリキュラムを設計しました。

- 「日本語教育の参照枠」で示されている「A1」「A2」という指標は、1 つの到達点ではなく幅のあるレベル帯を指しており、「A2」といった場合、いわゆる初期段階→進展段階→熟達段階のように A2 の日本語能力の幅を含んでいます。育成就労制度では、育成就労期間（3 年間）の終了までに、A2 の熟達段階まで達していることを目標とし、それを日本語試験（JFT - Basic 等）で確認することになります。育成就労期間（3 年間）に A2 の初期段階、

進展段階を経て熟達段階まで達するためには、教室での日本語講習に加え、実社会における生活場面・就労現場でのコミュニケーション、さらに企業側の伴走による日本語学習の継続など、複層的な学習・経験を通した日本語習得が不可欠です。

- 「A2 目標講習」モデルカリキュラムは、育成就労期間（3 年間）の早期に実施する日本語講習として設定し、A1 相当の学習者をまずは A2 の初期段階へ引き上げ、進展段階へ移行させることを目標としています。具体的な学習の進め方としては、教材の一つとして「いろいろ 生活の日本語」（以下「いろいろ」）を活用し、A2 判定試験（JFT - Basic）に向けた学習を支援します。「いろいろ」を使用した場合、A2 の初期段階～熟達段階にかけて必要となる総学習時間の目安は 200 時間ですが、「A2 目標講習」ではこのうち前半の 100 時間に相当する学習項目を扱います。
- 後半の 100 時間に相当する学習項目については、「A2 目標講習」終了後、学習者自ら学習を継続して、A2 の熟達段階に達することができるよう支援します。「A2 目標講習」では、「いろいろ日本語オンラインコース」を活用した学習継続の方法を導入します。さらに、講習終了後に企業と学習者が、A2 の熟達段階までの道のりを自走できるよう、学習継続や学習管理をサポートするツールを整備します。（※別途サンプル集を参照）
- 本モデルは、登録日本語教員が不足する地域における入国後講習や、全国各地域に散在する学習者をつないで一つのクラスを編成して講習を実施するようなケース等に対しても、広く教育機会が提供できる講習形態が期待されることから、オンライン同期型による日本語講習を想定したカリキュラムです。オンライン同期型の日本語講習とは、あくまでも日本語教師と学習者、あるいは学習者同士の双方向のコミュニケーションを前提とした教育形態であり、オンデマンド等による個人での学習を前提とした講習ではありません。
- オンライン同期型の日本語講習において、安定した受講には、資料の閲覧やグループワークの操作がしやすいパソコン（PC）が推奨されます。そのためには、PC に加えて周辺機器や通信環境を整えるため、育成就労外国人を受け入れる事業所による支援が必要になります。そうした支援が難しい場合、現実的には多くの学習者が使用可能なデバイスとして、タブレットやスマートフォンでの講習受講になることも想定されます。その場合、資料の提示や操作が制限されたりすることも念頭に、日本語教師による指導上の工夫や準備が求められます。

3. モデルシラバスの構成・内容

- シラバスは、「A1 相当講習」「A2 目標講習」それぞれ、以下の 2 部構成になっています。（※各モデルシラバス参照）

A1 相当講習

1	育成就労外国人が遭遇する場面における課題遂行（生活・就労）
2	就労開始準備の活動

A2 目標講習

1	育成就労外国人が遭遇する場面における課題遂行（生活・就労）
2	自律学習支援の活動 ※オンライン学習支援（活動）を含む

- 本モデルは、「日本語教育の参照枠」の理念や学習・評価の枠組みを参照して設計されています。各モデルシラバスは、A1・A2 共通して「育成就労外国人が遭遇する場面における課題遂行」を学習目標とする Can do をベースに構成されています。生活および就労の Can do の選定にあたっては、まず、育成就労外国人にとって優先される課題を、文献調査、企業等へのアンケートおよびヒアリング調査をもとに、以下【A】～【D】の4つのカテゴリーに絞りこみました。そのうえで、4つのカテゴリーに該当する Can do を、生活・就労の Can do を学習目標とする、既存の教材より選定しています。

● 育成就労外国人の課題遂行（生活・就労）〈4つのカテゴリー〉

【A】人間関係・交流（生活・就労）

【B】生活場面

【C】業務遂行

【D】労働安全衛生・勤怠

● Can do 選定の基にした教材・リソース

生活に関わる Can do 【A】【B】	A1：「いろどり 生活の日本語 入門」（国際交流基金） A2：「いろどり 生活の日本語 初級 1」（国際交流基金）
就労に関わる Can do 【A】【C】【D】	A1：「いろどり 生活の日本語 入門」（国際交流基金） 「はたらくための日本語 職場のコミュニケーションⅠ」（凡人社） 「げんばのにほんご」（外国人技能実習機構） A2：「つながるひろがる にほんごでの暮らし」（文部科学省） 「はたらくための日本語 職場のコミュニケーションⅡ」（凡人社） 「げんばのにほんご」（外国人技能実習機構）

- また、特に【D】の「労働安全衛生」に関しては、育成就労外国人にとって最優先に求められる課題であるため、幅広く以下のテーマを取り入れています。

● 労働安全衛生に関わるテーマ

【A1 相当講習】

1. 日本の職場の基礎知識（服装・時間厳守・報連相・5S など）
2. 就労現場で遭遇する基本的な表示の意味理解
3. 安全に働くためのやりとり（危険な行為への注意・反応、異常の報告、困った時の申し出等）
4. 災害・緊急時の行動（短く簡単な注意・反応、事故やけがの状況の簡単な報告）

【A2 目標講習】

1. 健康診断の日本語（いろどり・はた日版）
2. 避難訓練の日本語（いろどり・はた日版）
3. 緊急事態対応の日本語
4. 安全確認の仕方
5. 年金と健康保険の日本語（いろどり・つなひろ版）
6. 労災の日本語（いろどり・つなひろ版）
7. 労働安全衛生に関する聞き取り

（※とっさの指示／表示理解／緊急事態／安全のための日本語／服装確認／整理整頓）

- 本モデルでは、育成就労外国人にとって特に求められる3つの言語活動（聞く、やりとり、読む）について、講習の序盤・中盤・終盤に評価（聞くテスト、パフォーマンス評価、筆記試験）を設定しています。「日本語教育の参照枠」を参照し、特にパフォーマンス評価ではルーブリックを活用した「やりとり」の評価の実施を設定しています。（※各モデルシラバス、別途サンプル集等を参照）
- また、各シラバスには、Can do（課題遂行）をベースにした学習だけでなく、より学習者個別の社会生活につながる学習を促すための教室活動を取り入れています。「A1 相当講習」では、「就労開始準備の活動」として、自分が暮らす予定の地域や就労先（企業等）について調べて発表を行う活動など、実際の生活や就労で関わることになる人との対話の材料になる教室活動を取り入れています。「A2 目標講習」では、「自律学習支援の活動」として、就労開始後の実社会でのコミュニケーションの経験（生活・職場）を記録し、教室活動の中で振り返る活動や、就労しながら自分のペースで学習を継続するための学習管理を支援する活動を取り入れています。（※各モデルシラバスを参照）

4. 教材の選定と活用の方法についての留意点

- 本モデルでは、生活・就労の Can do（学習目標）の達成のため、複数の教材を選定しており、シラバス全体として複数の教材を組み合わせる形態となっています。モデルカリキュラムの活用にあたっては、以下の点にご留意ください。

- 複数の教材を部分的に活用するシラバス構成であるため、各モデルシラバスで指定されている教材は、どの教材においても全学習項目のうち扱われる課と扱われない課があります。各教材が本来意図する学習の連続性とは異なる形ではありますが、本モデルカリキュラムの目的を達成するために、教材を効果的に活用する工夫が求められます。（※別途サンプル集を参照）
- 「いろいろ 生活の日本語」については、以下の3点に留意してください。

1) 時間配分と学習内容

1課あたりの時間配分に関して、1課2～4時間で実施することを想定してシラバスを組んでいます。所定時間内で想定している活動は、聞いたり話したりなどの活動に加え、活動に必要な漢字、語彙、文法などの言語知識の練習などが含まれます。また、学習者のペースや学習状況に応じて対応できるよう、まとめ・復習の時間も設定しています。状況に合わせ、適宜、実施内容を調整してください。

2) 扱われる課・扱われない課

本モデルでは、「A1相当講習」では「いろいろ 生活の日本語 入門」を、「A2目標講習」では「いろいろ 生活の日本語 初級1」および「いろいろ日本語オンラインコース 初級1」を使用しますが、いずれの講習においても、以下の通り、「いろいろ」の中で扱われない課が複数あります。

● 本モデルカリキュラムにおける「いろいろ」の学習対象課の数

	講習内で扱う課	講習内で扱われない課
A1相当講習（100時間）	「いろいろ入門」 14課分	「いろいろ入門」 4課分
A2目標講習（100時間）	「いろいろ初級1」 11課分	「いろいろ初級1」 7課分
講習終了後の学習（100時間～）	※未習「いろいろ初級2」全18課	

3) 「A2目標講習」終了後の継続学習

育成就労制度の要件となる日本語試験（JFT-Basic）で「A2判定」を目指すうえで、「いろいろ」は必須の教材であることから、上表で示した講習内で扱われない課や未習内容である「いろいろ初級2（全18課）」については、講習終了後に、「いろいろ日本語オンラインコース」を活用して、課の順番に沿って効果的に学習を継続・完了できるよう支援します。

- 「A1相当講習」および「A2目標講習」のシラバスは、生活 Can do を中心とする「いろいろ」と、就労 Can do を軸とする別の教材を組み合わせで構成されています。本モデルでは、特に就労 Can do を扱う教材は一つに限定せず、複数のリソースを選定できるよう、モデルシラバスを2種類示しています。

- 「A1 相当講習」のモデルシラバス①（いろどり・フリーコンテンツ版）、および「A2 目標講習」のモデルシラバス①（いろどり・つなひろ版）は、教育実施者にとってアクセスしやすい教材として、無料公開されている教材を基に構成されています。こうした無料公開の教材は、アクセス面での利点がある一方で、本モデルカリキュラムの目標達成するうえでのハードルもあります。例えば、「A2 目標講習」で、就労 Can do の主教材となる「つながるひろがる にほんごでのくらし」（以下「つなひろ」）は、本来学習者が主体的にコンテンツを活用し、地域の支援者の力も借りながら学習を進めることを想定した教材です。日本語教師が、課題遂行型の授業を行うための教室活動や Can do のチェック（振り返り）といった教育的機能は備えていません。「つなひろ」の活用にあたっては、各教育現場の日本語教師による、十分な追加教材の準備が必要になります。
- 一方、「A1 相当講習」のモデルシラバス②（いろどり・はた日版）、および「A2 目標講習」のモデルシラバス②（いろどり・はた日版）は、「はたらくための日本語 職場のコミュニケーション」シリーズ（以下「はた日」）という市販テキストの就労 Can do によるシラバスです。「はた日」は、市販教材であり、有料である点が、モデルシラバス①とは異なります。教材へのアクセスの面で負担がかかる一方で、「はた日」は、就労 Can do を学習目標に据えた、課題遂行型のタスク・練習・振り返りを含む授業展開の教育的機能を備えた教材（テキスト）としての利点があります。本モデルにおける、就労 Can do の課題遂行を教育実践に落とし込む上で、効果的な実践が検討しやすくなることを見込んで、選択肢の一つとして提示しています。
- 上記の通り、就労 Can do に関わる教材の違いによる、2つのシラバスを提示していますので、教育現場の状況に合わせてご検討の上、ご活用いただければと思います。

5. モデルカリキュラムにおける自律学習支援

- 先述の通り、本モデルでは、育成就労期間（3年間）を通して、日本語教師による「日本語講習」のみによって A2 の熟達段階へ達することを想定していません。就労を開始した外国人材にとって、実社会における日本語でのコミュニケーションや、企業側の伴走による日本語学習の継続といったプロセスが、A2 の熟達段階へ達するうえで不可欠になります。本モデルでは、A2 の熟達段階を目指す日本語学習やそのための学習管理について、学習者個人によってそれらを実践・完結させるような、孤立した学習モデルではなく、育成就労のベースとなる就労現場の日本人とのコミュニケーションや企業側による伴走を前提に、日本語学習の継続・学習管理を実践・継続させていくモデルを提示しています。
- まず、自律学習支援の一環としては、「A1 相当講習」においては、日本語教師との面談で学習記録シートを使った振り返りを行う活動を取り入れています。また、「A2 目標講習」では、学習者が自らの就労現場や生活場面での日本語使用を記録し振り返る活動や、「いろどり日本語オンラインコース」の学習計画・実践・振り返りによる学習管理の習慣・意識づけ

を促す活動など、学習者間あるいは教師との面談等での振り返りの活動を取り入れています。（※各モデルシラバスを参照）

- さらに、「A2 目標講習」終了後の自律学習に向けての支援として、就労現場（企業側）の日本人とのコミュニケーションを前提とする、学習管理のためのシートを整備しています。こうしたツールによって、「A2 目標講習」終了後も、学習計画や目標を立てる、実践の記録をつける、進捗や成果をまとめる、面談をする（企業側の伴走）というサイクルによって、地域や職場への定着、そして特定技能 1 号への移行という最終的な目標に到達できることを想定しています。
- 育成就労外国人が日本語講習終了後に、企業側による伴走を受けながら、学習のプロセス・成果を振り返り、その後も日本語学習の連続性を担保していくことを想定すると、日本語講習内でまとめた記録や成果物、あるいは講習終了後に活用するシートなどは、「日本語教育の参照枠」等で推奨されている「ポートフォリオ」という形でまとめていくことが理想です。本モデルにおいても、講習内で扱うシート類を紙ベースで対応できる場合は、ポートフォリオをまとめる活動を取り入れることもご検討ください。
- 一方、育成就労外国人の学習環境がオンラインをベースにしたものになる可能性や、講習を受講するデバイスも多様化する可能性が高いため、学習の記録や様々な成果物を一つのポートフォリオにまとめる活動は難しくなることも予想されます。そのため、本モデルでは、実行可能性の観点から、学習の過程をポートフォリオにまとめる活動を必須の取り組みとしては設定していません。本モデルでは、ポートフォリオという物理的な形がない場合でも、外国人材と日本語教師あるいは就労現場の指導者等が、学習の記録や成果物等を対話の材料としてコミュニケーションを行う活動に活用することによって、ポートフォリオの機能を可能な範囲で再現できるよう促しています。
- 以上、本モデルカリキュラムの大きな方針と概要をまとめました。本モデルは、すべての育成就労の現場を網羅した設定で構成されているものではありません。あくまでも、育成就労で来日する外国人材と、育成就労制度を活用する企業が、一つになって育成就労の目標を達成できるような土台として、効果的な日本語教育の設計を提示したモデルです。ご自身の関わる育成就労の教育現場の状況に合わせて、日本語講習編成に本モデルをご活用ください。

（「育成就労制度における日本語講習モデルカリキュラム開発等事業」受託者：一般財団法人日本国際協力センター）